

# ぼくの大きさ 神戸市立奥の池幼稚園（兵庫県神戸市）

## 事例1 「天井までとどいた！」(中学3年生との交流)

隣接する舞子中学校の3年生が家庭科の「保育」の課程で、仕掛け絵本を手作りしている。年3回の交流の3回目は、毎年その手作り絵本を実際に幼児に読み聞かせ、幼児への理解やふれあいを楽しむ機会としている。

(中学校のねらい)	幼児とふれあい、幼児への理解や親しみの気持ちをもつ。 4歳、5歳の幼児の発達段階を知る。
(幼稚園のねらい)	自分より年少の子どもへのいたわりや思いやりの気持ちをもつ。 いろいろな中学生とのふれあいを楽しみ、人とかがわる楽しさを味わう。 一緒に遊ぶことを通して、年上のお兄さんやお姉さんへの憧れをもつ。 大きく成長することへの期待や夢をもつ。

中学生は事前に幼児の生活の姿を参観する。お弁当や机、椅子などの小ささや幼児の身長が自分とあまりに差があることに「ちっちゃーい！」と驚く。幼児に突然ニコッと笑われたり、「お姉ちゃん」と話しかけられて戸惑っている中学生も少なくないが、今回感じたことから、仕掛け絵本へのイメージ作りにつながっていく。

### <中学生の手作り絵本を見る>

幼児1～2名、中学生1名の小グループになる。お互いに緊張気味なので、まず、気持ちをリラックスできるように、体を動かしたり手をつないだりするなかよし遊びやゲームなどをする。

体を半回転させてパートナーチェンジをするフォークダンスでは、目の前にいる中学生と手をつないで踊っていても、クルッと振り返って現れる大きな脚に目がキョトンとしている。何度も繰り返すが驚きの眼差しは同じだった。

ジャンケンをして幼児が勝ったらおんぶや抱っこをしてもらおう「おすもうジャンケン」のゲームでは、抱っこをされ、ぐっと上に上がると急に目線が高くなることに「わあ！すごい、先生より高くなった」と喜ぶ。最初は恐る恐る抱っこしていた中学生も幼児が喜ぶとうれしくなり、抱っこして揺らしたり、幼児が手を挙げると更に高く上げようとしたりする。天井の梁に手が届きそうになり、幼児は張り切って手を伸ばす。手が届いた瞬間、「やったあ、見て見て手が届いた！」と叫んでいた。周りのみんなに振り返られ、得意そうな中学生と幼児のペア。中学生1人に対して幼児が2人いるところは、一度に2人を抱えようとする。2人一緒に抱えられて顔を見合わせて笑う幼児たち。「お兄ちゃんすごい力持ちや」と喜んでいた。

その後、絵本の読み聞かせをする。読み進めていくうち、次第に中学生の膝のったり、もたれかかったりして和んでいた。



## 事例2 「先生ってどれだけ大きいの？」

中学生との交流を体験し、大きくなることや人の大きさに興味をもち始め、K男が興味津々の顔で、「坂の上から見たら、先生こんなにちっちゃかったのにだんだん大きくなってん。先生って一番大きいのはどこに来た時なん？」と聞く。「そうだねえ、君の目の前にいる時かなあ」と答えると、ぴったり体を寄せてくる。「わあ、でも大きさ分かんわ」引付きすぎていてわからないようだ。「K君は先生のおへそ位かな」と言うがK男の反応はあまりない。(自分の身長と保育者の身長を比較する言葉がなぜピンとこないのだろうと疑問に思ったが、K男もそれ以上興味を示さなかったので、そのまま様子を見る)

かけっこや玉入れなどいろいろな運動遊びを楽しんでいた時のことである。玉入れ台を保育者が運ぼうとした時、K男が走ってきた。「先生、僕分かったで。先生の背の高さ、玉入れ台と一緒に！」と叫んだ。玉入れ台の横に立った保育者の背の高さを玉入れ台と比べることで、保育者の背の高さが分かったようである。「一番大きいときの先生」という言葉に、保育者は背の高さをK男と比べることで伝えようと思った。しかし、それではK男の背の高さは分かって、保育者の背の高さは分からない。玉入れ台と同じ高さなら誰にでも保育者の背の高さを知らせることができる。K男の測定の単位の芽生えと受け止められる。



## 事例3 「僕の大きさ、君の大きさ」

大きくなるということは子どもにとって大きな喜びである。毎月体重のみだが、学期の初めには身長も計測する。3学期が始まり、養護教諭に身長を測ってもらった。

T男は、何度も「ねえ、僕とH君ってどっちが大きい？」「僕とC君はどっちやろ？」

と背の高さに興味をもち、友達と背比べをし始めた。しかし、二人で並んで立ってみてもどちらが高いかよく分からない。「H君の方が高いで」と友達から言われても「僕の方が高いんちゃう」と疑問をもっていた。T男は自分の目で確かめたいと思ったらしいが、空間で測るのは難しい。

そう思って見ていると、T男は壁に足を付けて仰向けに寝て、自分の頭の所に上靴を置いた。H男やC男にも同じように寝させて頭の所に上靴を置いた。靴のある場所を見比べて「ほんまや、H君の方が大きかった」と自分の目で確かめていた。そのやりとりを見ていた友達が「私もやってみよう」と試し、「Yちゃんとどっちが大きいかなあ」と比べ始めた。

数日後、「T君、寝てみなくてもどっちが高いか分かったで」とM子とS子が鏡の前で背比べをして見せた。「ほんまや、Mちゃんすごいなあ」とT男は友達の発見を喜んでた。



## まとめ

年に3回会って遊べる成長期の中学生は会うたびごとに大きくなっていく。

大人がそれを思うだけでなく、一緒に遊ぶ幼児たちが何よりそれを感じていた。

「お兄ちゃんまた大きくなってた」「僕もご飯いっぱい食べて大きくなったのに、前、お兄ちゃんが来た時と同じじゃった。お兄ちゃん、足長くなったんや」など憧れの的の中学生に対しては観察する目も鋭い。中学生の大きさが自分の大きさに、また周りの大人への興味にもつながり、それが長さや実測への理科的な関心につながっている。

人とのかかわりに抵抗感がある幼児もいる。現に、中学3年生には不登校の生徒も多く、この交流の機会もひとつのきっかけにならないものかと中学校の教師は考えている。実際、不登校が続いていたが、幼稚園との交流には参加し、緊張を抑えながら園児とかかわっていた生徒も数名いた。なかなか話しかけられないものの幼児に手を引かれ、園庭で恐る恐る泥だんご作りをしている姿があった。中学校の教師とその生徒や幼児の姿を話し合うことで、幼稚園の保育者も幼児の心を見つめ、捉えなおす機会になった。幼児にとっても同年齢の友達や園内の職員だけでなく、いろいろな人とのかかわりは自分の気持ちを表現したり、相手の話を聞いたりするコミュニケーション力を養うことに大きな影響がある。かかわりの機会や場を広げ、幼児の成長を支えていきたいと考える。

## みどころ

幼児も、自分の成長を感じることはとても嬉しいことです。「大きくなった」ということは一般に背の高さのことをいい、幼児もそう思っています。また、幼児期は体重の増減があるので、体重で成長を感じることができない場合があります。この事例から「身長が高くなった」ということは、このような経験の積み重ねの中で実感していくことの大切さが分かります。測定した数値で成長を知ることは、自分の成長を実感することには結びつきにくく、「確かにこうすると分かる」と、自分で納得する方法を考えています。さらにその自分の考えのよさを、保育者や友達に伝えていきます。中学生とのかかわりにより引き出されたこうした姿に、成長が表れています。